

次世代人文学開発センター

◇教員◇

文化交流学部門

教授：小島毅

教授：芳賀京子、唐沢かおり（兼務）

准教授：松田陽（兼務）

助教：太田泉フロランス（地域連携担当）

国際人文学部門

教授：鈴木淳（兼務）

准教授：鎌田美千子

助教：吉田夏美（留学生特別講座プログラム担当）、笠原真理子（ヒューマニティーズ・リエゾン担当）、菊間晴子（大江文庫担当）、大足恭平（情報メディア室担当）

特任助教：夏木大吾（夏季・冬季特別プログラム担当）、塚原浩太郎（東京大学 150 年史編纂担当）

人文情報学部門

教授：鉄野昌弘（兼務）、中村雄祐（兼務）、小林正人（兼務）、高橋典幸（兼務）、高岸輝（兼務）

准教授：大向一輝、高橋晃一（兼務）

助教：塚越柚季

（1）次世代人文学開発センターについて

本センターは人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行っている。センターに籍を置く学生はいないが、授業や論文指導等を通じて教育も担当している。

センターの前身は、昭和 41 年度に創設された文化交流研究施設で、地域間の文化の交流や複数の文化領域にわたる総合的な研究を行なうことを目的としていた。その後、平成 5 年度に朝鮮文化部門、平成 6 年度に東洋諸民族言語文化部門が増設され、従来の組織である基礎理論部門とともに、

3部門からなる研究組織になった。平成14年度には朝鮮文化部門が韓国朝鮮文化研究専攻として独立し、同年7月から寄附研究部門「文化環境復元」が新設された。平成17年度からは組織名を現在のセンターの名称とし、その下に従来の基礎理論部門を継承した先端構想部門のほか、創成部門、萌芽部門を置いた。創成部門の死生学拠点（平成24年度に死生学・応用倫理センターとして独立）、萌芽部門のデータベース拠点・大蔵経（のうち創成部門、現在の人文情報学部門）のような、現在にまで続く研究拠点がここから生み出されている。平成30年度、センターの3部門は文化交流学部門、国際人文学部門、人文情報学部門に改組され、現在に至る。令和4年度には、センター内に「人文学応用連携推進室」が設置された。

（2）次世代人文学開発センターの特色

センターは、大学組織の上では研究科と研究所の中間的な存在と位置づけられている。すなわち、学内の独立した附属研究所とは異なり、人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行うものと規定されている。センター長は、研究科長が兼任する。専任の基幹教員に加えて、個別のプロジェクトを推進する兼務の流動教員を、人文社会系研究科の研究室から受け入れている。

「文化交流学部門」：

旧文化交流研究施設「基礎理論部門」の活動理念を発展的に受け継ぎ、「先端構想部門」の時期を経て、現在の名称になった。複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象にする研究、諸地域間の文化交流の研究など、特に領域横断的で国際的な研究を行ないつつ、それらを公開発信していくことを目的とする。前身である文化交流研究施設や先端構想部門には、専攻を異にする様々な分野の教員たちが着任し、それぞれの専門学問領域に基礎を置きながら、多分野・複数文化に関わる研究を行ってきた。歴代主任には、旧文化交流研究施設創設時の吉田精一教授を初代に、美術史学の秋山光和教授、チベット語・チベット史の山口瑞鳳教授、古代ローマ美術史・考古学の青柳正規教授、西洋中世史の高山博教授、西洋美術史の小佐野重利教授らがいる。平成27～29年度には集英社高度教養寄付講座、平成27～令和2年度には東京大学ビジョン2020推進事業「Sustainabilityと人文知」研究プロジェクトが置かれた。令和3年度以降は地域連携プロ

プロジェクトの本部も兼ねる。

教育面では「文化交流特殊講義」と「文化交流演習」を開講しており、その内容に応じて専修課程の必修科目に認定されていたりするので、文学部便覧の各専修課程の「授業科目および認定科目一覧」や、文学部の「授業科目一覧・授業時間割」次世代人文学開発センターの項を参照してほしい。

「国際人文学部門」：

留学生教育や国際交流、後期教養教育、各種プロジェクトへの参画を通して人文学の国際化を推進し、東京大学を世界に向けた学術研究の発信拠点にすることを目的とする。

人文社会系研究科・文学部には、諸外国から来た留学生が数多く在籍している。勉学及び研究に必要な高度な日本語運用能力の習得に向けて日本語及び日本文化の教授法開発を行うとともに、帰国後に大学教員を目指す留学生や将来日本語教員を目指す学生のニーズに応じて日本語教師教育に関する研究も進めている。

また、海外の大学と提携した夏季・冬季特別プログラムの企画・実施を通して学生の国際交流を推進している。平成 27 年度から開始された後期教養教育では、本郷キャンパスに所在する人文学教育部局として人文社会系研究科・文学部が積極的に協力し、多くの授業を提供している。その一環として教養教育の在り方に関する研究を行っている。

加えて、150 年史編纂、ヒューマニティーズ・リエゾン、日立東大ラボのプロジェクトにも参画し、これらに関する研究を展開している。

「人文情報学部門」：

人文社会学の基盤となる知識の保存・発信の方法がデジタル媒体へと大規模に転換され、進化する情報技術の影響に曝されるなか、人文社会学が培ってきた伝統的な研究方法と研究成果とを将来にわたって活かす、あらたな研究モデルの構築を人文情報学（Digital Humanities）として目指している。

平成 20 年 4 月に、当時の萌芽部門に次世代人文学データベース拠点が設置され、「SAT 大正新脩大蔵経テキストデータベース」と「言語資料データベース」とを柱としながら、あらたな人文学の基盤形成と研究方法の

本格的模索がなされた。このうち前者は「SAT 大正新脩大蔵経テキストデータベース」を基礎としながら、仏教研究遂行に必要な発展的研究情報アーカイブを構築し、あらたな学術空間の創出を図るもので、平成 25 年度から人文情報学拠点へと拡大発展し、創成部門に移行した。平成 30 年度の改組に伴い、拠点の名称を部門名とするようになった。

(3) 教員について

「文化交流学部門」：

本部門の専任教員は、小島毅教授、芳賀京子教授、太田泉フランス助教である。小島教授は東アジア海域の思想文化交流を専門とし、芳賀教授は地中海域の形象文化交流を専門としている。太田助教は西洋中世宗教美術史を専門とし、地域連携プロジェクトを担当する。また、兼務教員として松田陽准教授（文化資源学）が所属し、「鳥取県淀江町一帯を含む考古学的・文化資源的研究の支援プロジェクト」を担当する。

「国際人文学部門」：

本部門の専任教員は、鎌田美千子准教授、吉田夏美助教、笠原真理子助教、菊間晴子助教、大足恭平助教、夏木大吾特任助教、塚原浩太郎特任助教である。鎌田准教授は日本語教授法開発と日本語教師教育を専門とし、人文社会系研究科・文学部日本語教室室長を務めている。吉田助教は留学生特別講座プログラム（通称「留学生のための特別講座」）を担当している。笠原助教はヒューマニティーズ・リエゾンとの研究連携を担当している。菊間助教は大江文庫の運営を担当している。大足助教は情報メディア室の運営を担当している。夏木特任助教は夏季・冬季特別プログラムと後期教養教育を担当している。塚原特任助教は東京大学 150 年史編纂を担当している。兼務教員として鈴木教授（日本史学）が 150 年史編纂プロジェクトを、齋藤教授（中国文学）がヒューマニティーズ・リエゾンのプロジェクトを、唐沢教授（社会心理学）が日立東大ラボのプロジェクトを推進している。

「人文情報学部門」：

本部門の専任教員は大向一輝准教授、塚越柚季助教である。兼務教員と

しては、鉄野昌弘教授（国文学）、中村雄祐教授（文化資源学）、小林正人教授（言語学）、高橋典幸教授（日本史学）、高岸輝教授（美術史学）、高橋晃一准教授（インド哲学仏教学）が所属している。

(4) 授業について

「文化交流学部門」：

文化交流学部門は、共通講義として「文化交流特殊講義」「文化交流演習」を開講している。令和5年度は、小島毅教授が東アジア文化交流史、芳賀京子教授が古代地中海美術史、非常勤の長田年弘講師が古代ギリシア美術と宗教的背景、金沢百枝講師が中世ヨーロッパ美術史、松下道信講師が中国宗教史について開講している。

「国際人文学部門」：

国際人文学部門では、日本語教育学に関する科目を開講している。令和5年度は、鎌田美千子准教授による「日本語教育学概説」（文化交流演習Ⅴ）、「日本語教育学演習」（文化交流演習Ⅵ）を大学院共通科目として開講し、外国語・第二言語としての日本語の教授法に関する授業を提供している。

「人文情報学部門」：

人文情報学部門が開講する科目は「人文情報学概論」「人文情報学特殊講義」で、「人文学フロンティア教育プログラム」に位置づけられ、文学部の各専攻の壁を横断し、デジタルという地平から人文社会学全体の課題を俯瞰できる授業を提供している。「人文情報学概論」は全学大学院に向けて発信されるデジタル・ヒューマニティーズ教育プログラムの中心科目でもあり、文・理の壁を超えて学生・院生が集い、あらたな人文社会学知の形態を考察する貴重な場となっている。令和5年度は大向一輝准教授、塚越柚季助教と非常勤の永崎研宣講師による「人文情報学概論Ⅰ」「人文情報学概論Ⅱ」のほか、「人文情報学特殊講義」Ⅰ～Ⅳが大向准教授や兼務教員らにより開講されている。